

平成30年度第2回秦野市行財政調査会（行財政最適化支援専門部会）会議概要

1 開催日時	平成30年8月9日(木) 午前10時00分から午後1時55分まで	
2 開催場所	東海大学湘南キャンパス4号館3階 4-1B会議室 TOKAIクロスクエア内会議室	
3 出席者	委 員	坂野部会長、高井部会長職務代理者、石塚委員、大屋委員、田村委員 斎藤会長
	東海大学	高等教育室長、地域連携センター所長、地域連携センター地域連携課長代行、同課課長補佐、同課担当
	関係課等職員	企画課長、同課担当
	事務局	政策部長、行政経営課長、同課課長代理、同課担当3名
4 議題	(1) 東海大学における地域連携事業について (2) 現地視察 (3) その他	
5 配付資料	次第 資料 地域連携事業に係る質問事項 参考資料 『人口減少・少子高齢化等に向けた秦野市の行財政経営のあり方中間報告2018』  以下、東海大学作成リーフレット • To-Collabo • To-Collaboプログラム成果報告書2017 • TOKAI ENGAGEMENT～東海大学と地域をつなぐ8つの取り組み～ • TOKAI CITIZE NSHIP WAVE • TOKAI vol.191 (地域連携活動の成果と展望) • 東海大学チャレンジセンター 2017年度活動報告書 • 東海大学チャレンジセンター チャレンジプロジェクト&ユニークプロジェクト2018紹介マガジン	

## 6 会議概要（要点筆記）

【行政経営課長】本日は御多用の中、御出席いただきありがとうございます。また、本日は東海大学地域連携センター地域連携課の御協力の下、このような会議を開催させていただきました。ありがとうございます。東海大学のほうから関係職員の方5名に御出席いただいておりますので、名簿順に御紹介させていただきます。

### 一出席者の紹介一

それでは、本日使用させていただきます資料の確認をさせていただきます。

### 一資料の確認一

また、本日は行財政調査会の斎藤会長にも御出席いただいております。

それでは、部会長から御挨拶いただき、行財政調査会規則第6条第1項の規定により部会長が議長となりますので、進行をお任せしたいと思います。

引き続き進行をお願いいたします。

【部会長】本日はお忙しい中お時間をいただきまして、ありがとうございます。この部会を東海大学で開催させていただけることになり、本日は限られた時間ではございますが、いろいろな意見交換ができればと思っております。

東海大学の皆様へはすでに秦野市の方から御説明があったかと思いますが、改めてもう一度この部会でどういうことをやっているのか、また、我々が本日どのようなお話を伺いしたいのかということについて、お話をさせていただきます。こちらに斎藤会長がいらっしゃいますが、秦野市行財政調査会という審議会があり、その中に当部会があります。今年度のテーマとして、これから地域経営を考えていったときに、市にとって非常に貴重な資産である大学、とりわけ東海大学を生かせないかということが大きな課題になっています。長期的には少子高齢化という大きな問題を抱えており、そうした状況下で、市が抱えている強み弱みにはどういったものがあるかということをリストアップして検討していますが、やはりこちらの大学の存在が強みの一つとして外すことはできないだろうと考えています。秦野市とは既に協定を結んでいるところで、東海大学の先生方に審議会の委員をお願いしたり、あるいは何か講座を開くときに御協力いただくことは、長い間協定の中でやるべきことをやってきたのだと思います。今後はもう一歩ステップアップする形で、大学での教育研究あるいは学生、先生方、スタッフの方たちと協力してまちづくりや街の経営というものに取り組めないか模索しようということで取り組んでいるわけです。大学としても、トコラボを始めとして地域に向けた人材、自ら問題解決していくという教育プログラムをお持ちとのことですので、その辺りのお話を伺いながら、どのようにステップアップして協力関係や新たな関係を作ることができるのであるのかのヒントが得られれば、今日お伺いした意義が大きいにあるのではないかと思います。本日の会議をきっかけ

として、新しい展開の第一歩になればと考えております。

議事に移る前に、本日の会議録の署名委員ですが、規定により部会長と部会長が指名した委員1名となっております。名簿順にお願いしたいと考えておりますので、今回は石塚委員にお願いします。

それでは、議事(1)東海大学における地域連携事業について、東海大学地域連携センターから説明をお願いします。

### 議事(1) 東海大学における地域連携事業について

【東海大学地域連携センター所長】私のほうから、資料の御説明を含めてお話をさせていただきます。お帰りの際お荷物になるかと思いましたが、いろいろと関連する資料がございましたので、いくつか御用意させていただきました。

初めに、開くと東海大学の頭文字であるT型になる、『T o - C o 1 1 a b o』と記載のリーフレットがございます。昨年までの5年間、東海大学が文科省の補助予算である大学C O C事業をやってまいりまして、その成果を一昨年にまとめたものです。内容としては、どのようなプログラムでどのような事業をしてきたのかについて、一覧にしているものです。この中身をもう少し詳しくしましたのが、次の黄色い冊子になります。これが、トコラボプログラムの最終年となる2017年度の成果報告書になります。内容は、いろいろな取組みをやったという報告なのですが、さらに次の緑色の『TOKA I E N G A G E M E N T～東海大学と地域をつなぐ8つの取り組み～』というタイトルの冊子では、5年間にわたり全国8校舎の中でやってきたまとめとして、各先生方にお願いしていろいろな事業の成果をまとめたものです。最初の数ページをめくっていただき、特にこの6ページ目を見ていただくと、トコラボプログラムの概要として私のほうで整理した記述がございます。基本的には、4計画8事業と言う大きなテーマで構成されています。7ページ目の図にもありますように、それぞれ全国の自治体の共通する課題を整理し、4つの計画にそれぞれ2つずつの事業があって合計8つになっています。この東海大学の資源を生かし、全国の共通するような課題に対応できる事業を掲げながら、ここにある内容に基づきいろいろな形で実施してきたということです。以下の頁では、事業ごとに各校舎でどのようなことをやつてきたのかについて書いてあります。秦野市にも御協力をいただき、この湘南校舎及び伊勢原校舎を中心としていろいろな取組みをさせていただきました。特に秦野市とは、10ページ目の安心安全事業ではお世話になっております。学生や教員が開発した災害情報収集システムを実践的に使っていく機会の中で、いろいろ御協力いただきました。次の青い冊子ですが、『TOKA I C I T I Z E N S H I P W A V E』というタイトルのものがございます。東海大学では、地域連携を通じてPA型教育（パブリック・アチーブメ

ント型教育)を整備していくこうということで、トコラボを実施してきました。具体的には、学生一人ひとりが市民意識を醸成することが高等教育機関にとって非常に重要だということで、地域連携を単に社会貢献で終わらせるのではなく、教育に結び付けていくというプログラムにしていこうと進めてきました。その内容について、この5年間で動いていただいた先生方をシティズンシップ教育のモデルとして御紹介させていただくということで、この冊子を作りました。これも、全国にまたがっていろんな形で取り組んでいる一つの事例です。最後の2冊は、チャレンジセンターに関するものになります。私ども東海大学では、地域連携センターとは別にチャレンジセンターというものがございます。2006年に立ち上げ、そこから10年以上にわたり学生たちが主となるいろいろな社会貢献活動を推進していくこうと、大学がバックアップしていろいろな取組みをしております。どちらかというと、このチャレンジセンターは学生が主体となり、教職員がサポートするというシステムになっております。そこで活動報告書として2017年度に作成したものと、もう一冊はそれぞれのプロジェクトの概要をまとめたものになります。冊子は以上です。この他、全国のご父兄の方にお配りするために発行している『TOKA I』という雑誌のコピーを付けさせていただきました。つい最近地域連携の取組みを特集していただき、地域連携に積極的なことを紹介する紙面がございましたので、参考になればと思います。以上のように、東海大学、特に湘南・伊勢原校舎に関しましては、秦野市も含めた3市1町として、伊勢原市、平塚市、大磯町といったそれぞれの市町村と協定を結んでおります。こうした地域と充実したプログラムを用意して、地域連携活動を推進しているという状況です。トコラボプログラムは終了しましたが、今後もこの基盤を生かし、積極的に教育の材料や研究の素材としていけるよう積極的に取り組んでいきたいと考えております。概要は以上です。

【部会長】ありがとうございました。それでは、我々からの事前質問事項と重なることもあると思いますが、今の御説明について質問等ありますか。

【委員】内容的な質問ではないのですが、こういった成果報告書や資料を作られた目的というのは、大学内への報告や周知のためでしょうか。あるいは、地域にいろいろ発信するためなのでしょうか。私はこれまで、このような素晴らしい資料等を拝見する機会がなく、今回初めて拝見しました。すごいものができているなと思ったのですが、どういった目的で作られているのでしょうか。

【東海大学地域連携センター所長】都市によって若干ターゲットといいますか、対象は異なりますが、特にトコラボプログラムに関しては大学COC事業として推進してきました。文部科学省が全国の大学に対し事業を投げ掛け、その採択として実施させていただいたものです。そういう意味では文部科学省

への報告も含め、全国の類似の事業を推進している大学及びその関係者にも送付しています。それとは別に、東海大学の場合は全国にキャンパスがございますので、その手綱を引くという部分で、こうした冊子をまとめていくことが学内的なひとつの統一感、アピールにもなります。その他、地域の方々にも機会あるごとにこのような資料をお渡ししております。ただ、こういった読み物ですので、どうしてもご興味のある方ということになってしまします。協定を結んでいる自治体の方には、御報告し、こうした資料を事前に読んでいただいた上でその取組みがどうだったのかについて評価をお願いしています。

**【部会長】**我々からの事前質問事項と重なることもあると思いますが、確認の意味も含めて御質問いたします。トコラボは文部科学省の補助金による事業として進めてこられたとのことですが、地域連携そのものについて、大学としては今後も文部科学省からの補助金に相当するような予算が用意されようとしているのでしょうか。トコラボに類するような、地域連携に関する研究活動に対して、大学として財源的にはどのように考えているのでしょうか。

**【東海大学地域連携センター所長】**トコラボを5年間実施していく過程では、文部科学省からの予算が年次的にも減らされたような事情もあり、財源的に少なくなっていくということがありました。当初計画よりも資金が不足してしまい、5年間のうちに学内資金を投下するというややこしいやり方で事業を維持してきました。そういう経緯がありましたので、現在トコラボに対する文部科学省からの補助金はなくなりましたが、大学としても多少の資金を投下する形でこのセンターを維持して進めています。そういう仕組みの下で、できることをいまのところ進めていくという状況です。今後のことを考えると、徐々に事業を圧縮していかざるを得ない部分もあります。近隣自治体との基盤はできていますので、今後はその基盤を生かして御相談しながら、工夫して進めていく体制を構築していきたいと考えております。

**【部会長】**文部科学省からの補助金は、どのくらいだったのでしょうか。

**【地域連携センター課長補佐】**大学全体として、総額で1億円超になります。

**【部会長】**PA型教育については、文部科学省から財政的な支援があったわけではなく、大学独自のものですか。

**【東海大学地域連携センター所長】**大学COC事業として採択いただくに当たり、我々から提言したものです。この地域活動は最終的に教育に資する取組みを目指しており、PA型教育も2018年4月から具体的にスタートしています。今年度から全国の1学年7~8千人の学生を対象に、必修科目として4つのPA型科目を履修する取組みがスタートしました。これがトコラボの成果の一つであり、現在は1年生が入学したら必ずシティズンシップ、ボランティア、地域理解、国際理解の4科目が必修になっています。基本的に

は座学によるレクチャーですが、アクティブラーニング型で皆で議論する形も取っています。

【会長】地域連携センターが立ち上がったときには、5年間の成果をさらに展開していくという目的があったかと思います。特に地域連携という名称を付けたことで、地元の3市1町という自治体との取組みをより具体的に進めようとしているのでしょうか。また、社会貢献も含め、市民意識の向上ということで、学生が地域の自治体と連携を深めながら具体的に教育とつなげて考えていくというお話をありました。地域連携センターとしては、具体的にどのような取組みを自治体とやっていくのか、どのように学生を巻き込んでいくのか、お考えはいかがでしょうか。

【東海大学地域連携センター所長】本日午後に、神奈川県も含めた広域連携会議が開催される予定になっており、第1回目としてスタートします。東海大学と協定を結んでいる3市1町の自治体の方々にお集まりいただき、いろいろな事業の立ち上げについて御相談できる場にしたいと考えています。一つには、これまでのトコラボにおける地域連携のつながりが1自治体と大学という関係で進めてきました。先程4計画8事業についてご紹介しましたように、実は各自治体に共通するような課題があり、これらをうまくまとめられればということがあります。もう一つには、自治体からの相談事は幅広く、急を要するようなものと時間をじっくり掛けられるものとがあります。学生の教育に繋げようすると、1年生の必修科目だけでは足りないため、各学部学科センターの専任教員に結び付けることが大きな課題になっています。そういうところに内容を落としていくためにも、自治体の持つ地域課題を事前に情報収集したいと考えています。こうした会議の場を通して、中期的な視点または課題を抽出し、適した学部学科センターの先生方につなげていくような取組みを今後やっていきたいと思っています。地域連携センターは事務組織ですので、教育組織とは異なります。そのため、学生と直にやり取りするのが難しい部分もありますので、学部学科センターとの調整が我々の機能かと思っております。

【会長】今年度から1年生にP A型教育の必修化が始まったとのことでしたが、その中の地域理解では、具体的にどのようなテーマを扱っているのでしょうか。

【東海大学地域連携センター所長】いまは実験的にいろいろな先生が協力しながら調整している段階ですが、基本的には地元の情報を基に理解してもらえるよう進めています。ただ、地域といっても学生によって捉え方が異なります。湘南キャンパスの場合、神奈川県内から通学する学生が多いのですが、秦野市を地域としてすぐ見るのかというとそうとも言えず、少し距離があります。地域の捉え方にもいろいろな解釈がありますので、そこから整理して

いくことになるかと思います。

【部会長】今のお考えとしては、今後のカリキュラムや体系づくりに当たり、3市1町との広域連携会議を通じて、各自治体に情報収集するためのアクセスの基盤というか条件のようなものをまず構築していくということでしょうか。

【東海大学地域連携センター所長】これまでの5年間で既に実施したトコラボ事業の中には、広域連携型の事業もあります。そうした中で整理していくこうかと思っています。

【部会長】先程の地域理解の科目についてどういったカリキュラムを作るかというお話がありましたが、学生が自分たちで地域というものを定義したり参加型で作っていくというやり方と、ある程度こういう課題があると提示した上でその課題ごとに掘り下げてもらうというやり方があると思います。その辺のバランスについては、どのように考えていますか。

【東海大学地域連携センター所長】その部分に関しては、現代教養センターというところが全体の教育プログラムをまとめています。まだスタートしたばかりですので、どういう方向に整理していくかというのは今後の課題でもあります。科目ごとにシラバスがありますので、実質的にはそのシラバスに従って先生方が創意工夫しながら運営していくことになります。7千人に対して授業として進めていくことになりますので、いまはそこで手一杯な状態です。

【部会長】必修化を始めるに当たり、自治体にこんな協力をしてもらえるとともに役に立つ、あるいは、これができるないのでなかなかいい教育に結び付かないというような、課題点はありますか。

【東海大学地域連携センター所長】学生は科目・授業として単位を取ることが必要ですので、最終的には単位を取るために何をすればいいのかという部分とコミュニケーションしていくことが先生には求められます。そういう意味では、プログラムの中で成立するような地域課題を御提供いただくことが重要かと思っています。いろいろな課題があり、やればやるほど際限がない世界ですので、それを授業のパッケージの中で段階的に進めていく、あるいは持続的に進めていくといったように連携できれば、我々教員はやりやすいです。

【部会長】カリキュラムづくりに直接携わっている教員と自治体とは、どういう形で絡んでいるのでしょうか。

【東海大学地域連携センター所長】カリキュラム自体に自治体の方の実質的な参画があるかというと、直接的にはありません。今後の課題としては、そういったところにも顔を覗かせていただけるような関係づくりになるかと思います。

【部会長】他に御質問がなければ、事前質問事項への回答をお願いしておりますので、その順番にお話を伺いしたいと思います。

【東海大学地域連携センター所長】1番目の質問は、これまでの御説明と重複しますのでお手元の資料等を御覧いただければと思います。特にトコラボプログラムが地域連携の基盤をつくってきた結果ですので、資料のほうで御参照いただければと思います。

2番目ですが、これに関しては県央・湘南地域の地元自治体と連携し、さまざまに取り組んできました。先程御紹介したように、湘南校舎と伊勢原校舎においていろいろなプログラムを進めてきました。お手元の冊子「TOKAI ENGAGEMENT」を御覧いただければ分かりやすいかと思います。

3番目の質問が重要なものになるかと思いますが、(1)については室長から御説明させていただきます。

【東海大学高等教育室長】東海大学は秦野市との提携事業として、1983年に事業協定を締結しました。その1年後に平塚市と結び、さらに近年になって伊勢原市、大磯町とも締結した経緯がございます。東海大学の住所は平塚市ですが、学生のアクセスの拠点や下宿の中心は秦野市大根地区であり、多くの学生が秦野市で生活し勉学に励むという環境です。東海大学がこの地に来て以降、多くの学生が秦野市に居住しておりますので、地域の方とのいろいろな交流やお世話になること、あるいは御迷惑をお掛けするようなことも実際には起きています。地域に評価される大学でなければ、大学の価値が損なわれるということもあります。東海大学としては、多くの学生がお世話になる平塚市と秦野市、特に秦野市を皮切りに地域連携が必要であると考え、当時の柏木市長と当学の学長とで協定を結ぼうということになりました。秦野市とは、東海大学ができることは何かについて協議しながら進めてきました。市役所にはいろいろな審議会があり、本学の教員が委員として就任することが中心になるかと思います。あるいは施設の相互利用がありますが、図書館の相互利用を始めたのは秦野市がスタートで、市民の方が何年も前から大学図書館に入り出しができるような仕組みをつくったりもしています。施設面では、市役所の職員採用試験会場を提供したり、あるいは、市民の方が興味あるテーマについて、知の発信として市図書館と連携した出前授業・講座を開催するという事業を行っています。学生のボランティアかもしれません、秦野市のたばこ祭のような催しに学生を派遣して、地域の活動を盛り上げることに一役買っています。足元を見ますと、学生の団体やクラブ団体が大根地区の美化環境の保全のために協力できないかということで、清掃活動に参加しています。これらが、具体的な取組みの一環かと思います。

【東海大学地域連携センター所長】次に、(2) 今後の取組みをどのように考え

ているか、についてです。先程御説明したように、我々東海大学としては学生の教育とどう結び付けるかが大きなテーマです。中でも、学部学科センターの行う専門教育にどう結び付けていくかということが課題になります。地域の課題によっては、学部学科や担当する教員が異なることもありますので、その辺りのマッチングができるような状況づくりをしていきたいと考えています。広域連携会議もその一つですが、日頃から秦野市との交流の機会を増やして、我々がやろうとしている、あるいは先生方が研究教育しようとしている情報を知つていただく機会を増やすこともあります。さらに、秦野市の課題に対して我々が吸収できるような機会を設けながら、マッチングをいかに適正な関係でつくれるかということで進んでいくのかなと思っています。トコラボの中で進めてきた事業の一つに、健康バス事業があります。伊勢原市では盛んな事業ですが、秦野市にも協力いただいて秦野市エリアでの展開も考えております。観光に関連する取り組みについても、観光ブランドというような言い方で、ブランドと観光をくっつけて広域型で検討していく展開していく、その中に秦野市の資源も生かすような可能性が生まれるのではないかと思っています。学部学科の先生方がどんなテーマで教育したいかという点も含めて、今後調整していくことを思っています。

(3)については、先程も御質問がありましたが、秦野市との協力体制については従来どおりの流れで差し支えないと思っています。我々の取組み状況を御理解いただきながら、14回の授業で完結するようなプログラムに御協力いただくななど、具体的なところが一つのポイントになるかと思います。もう一つは、授業の中で地域連携活動をすると、学生たちを外部に連れ出す機会が多くなります。学生を外部に出すためには、先生方にとっては大学内での必要書類作成などの煩わしさがあります。それに加えて、学生にとっては、交通費はどうするのかといった実質的な面を問うこともあります。謝金はなくても、交通費くらいどうにかしたいというのが先生方や大学側の意見なのですが、その辺の手はずが難しいこともあります。例えば自治体側が交通手段を用意くださるような体制ができると、外に連れて行きやすくなります。大学所有のバスを活用して外に行くこともできるのですが、連携体制づくりに少しづつ御協力いただければと思っています。

(4)について、メリットということでは、湘南校舎は秦野市が地元ですので、身近なことがとにかくメリットと言えます。大学外に学生を連れ出す場合、例えば3限に連れ出して4限には帰つてこなくてはいけません。そういう場合には、身近にあるということはメリットです。そういう中で、実質的なことができればと思っております。健康文化も含めていろいろな行事がありますので、秦野市の資源を生かして、学生たちが地元意識や地域理解を深めることができるとありがたいことです。

【東海大学高等教育室室長】秦野市は山があり川があり、自然豊かでいろいろなフィールドがあるというのがメリットだと思います。本学の学部の一つに教養学部があり、そこに自然環境を学ぶところがあります。秦野の自然やその保全に関する学習機会なども、ここだからこそできるという面があります。そういう意味では、秦野市の立地や環境は私共の教育のフィールドメリットであろうと思います。

【東海大学地域連携センター所長】地域に対する具体的な貢献の事例として、一昨年から2カ年に渡り、平塚市から相談を受けた事例が挙げられます。「市長と語ろう！ ほっとミーティング」というタイトルで、学生参加を求められたものです。市長が授業に参加し、学生と対話する機会があつたり、その中で「来街人口を増やしたい」という大きなテーマをいただいて、例えば平塚市ですから湘南平を生かすにはどうしたらよいのか学生から提言して欲しいというような依頼がありました。こうした具体的な課題、さらに授業等にも参加していただく歩み寄りも含めて、学生たちは非常に身近に地元を感じることができました。グループワークで取り組み、最終的には各グループが市長の前でプレゼンテーションする機会もあり、学生たちがそれぞれの視点で何かを提言できました。平塚市の政策に多少なり影響を与える可能性があることから、学生のモチベーションが非常に高まりました。こうした取組みが、今後も秦野市含めてありえる機会かなと思いますし、貢献事業の実績として挙げられるかと思います。さらに先程御紹介しましたトコラボの中では、すでに安心安全の情報収集活動も、自治会や高校と連携して推進しています。そういう意味では、自治体だけでなく地元の住民の方、高校生の方とプログラムに取り組めるというのも一つの貢献事業であると思っています。身近だからこそできる関係づくりを、さらに進めていければと思っております。以上が3の回答となります。

【東海大学地域連携センター所長】続いて、4の学生の参加・関わり方についてお答えします。秦野市とは、出前授業といったいろいろな取組みをしています。さらにチャレンジセンターのプロジェクトでは、いろいろな取組みをしております。特に秦野市とは、実際に駅前の活性化に向けて学生がイベントを企画したり、自主的にいろいろな関わりを持っています。学生自ら企画・運営するというプログラムは、チャレンジセンターを中心にできているかと思います。

さらに(2)今後の中での関わり方としては、チャレンジセンターのプログラムとは別に、専門教育の中に授業の一環としてどう取り組んでいくかということについて、教員及び学生が参加できるような体制を実質的につくりたいということです。指導を担当するのは担当教員になりますので、それぞれの学部学科の特性、又は先生方の研究とのフィット感とマッチングさせることで成立

するかと思います。

5にある地域連携センターの役割に関しては、先程御紹介したとおりです。地域連携センター自体は、昨年4月に立ち上りました。大きく分けて、3つの事業をしております。一つは、地域連携について自治体といかにつなげていくかというような機能です。もう一つは、生涯学習講座の運営をしています。湘南校舎の中で開催することもありますが、相模大野にユニコムプラザという相模原市運営の施設をお借りして、地域の方々を対象にさまざまな講座を有料で開催しています。小田急電鉄とタイアップして、小田急電鉄の紹介講座にもなっており、現在では年間100近い講座を動かしています。3つ目の事業として、東海大学前駅前にクロスクエアという交流施設の拠点を設けて、その運営をしています。その場所を、地元の方に展覧会の発表の場として使っていただいたり、さらに東海大学の学生や教員が連携講座と称して20名くらいを募集定員に、いろいろな講座を開催するということもやっております。クロスクエアの機能としては、いま秦野市にも御協力いただいておりますが、地域連携紙というローカルメディアを作成しています。「ちえん」というタイトルのニュースペーパーを季刊ごとに発行しており、3市1町のいろいろな情報を編集しながら、東海大学がいろいろな地域連携活動をしていることを広く知っていただこうという趣旨で作成しています。各自治体の金融機関にそのニュースペーパーを置いていただいて、住民の方々への情報提供資料として作成しています。地域連携センターとしては、以上のような3つの事業を展開しています。

次項の質問にあるまちづくり連携の可能性や、7にある中間報告にあった学園都市東海についての考えに関しては、まとめてお話をさせていただきます。

中間報告を拝見し、『学園都市東海』という名称は違和感なくフィット感を持って感じています。とはいえ、学生が秦野市イコール東海大学だと実質的に意識しているかというと、そこには大きなギャップがあります。学生にとっての地元とは自分が住んでいるところであって、大学があるところは何なのだろうと思っているのが普通です。そういう点では、まちづくりや学園都市というものが学生にとってどの程度フィット感があるのかというと、少し難しいように感じています。学生との隔たりを埋めていく上では、先程の平塚市のほつとミーティングのように、まちづくり連携を通じて徐々に自分たちの地元であるとか地域であるとか、そういう意識付けをして進めていかなくてはいけないのではないかと思います。さらに我々としては、トコラボを通じてつくった基盤をいろんな意味で発展させたいと思っています。秦野市プラス平塚市、伊勢原市、それぞれの自治体の協力を得ながら、大学が本来の意味での知の拠点になれるように動かしていきたいと思っております。学園都市構想は大いに大学としてはおもしろい話だと思います。ただ、それをもう少しビジョンを明確に

しながら掲げなくては、名前だけで終わってしまうのではないでしょか。例えばつくば市のロボット特区のような、構造改革特区とした位置付けでエリアを作り、広域連携型で取り組んでいって、内閣がバックアップする。そういうまちづくりができると、学生たちも盛り上がりますし、自分たちの町やエリアだという意識も高まるのではないかと思います。東海大学の湘南伊勢原校舎には9学部あり、教育分野も広がっています。いろいろな学生たちを駆り出すためにも、一元的なテーマではなくて、街の中にいろいろな要素を盛り込めるようなネタがあれば、我々も参加しやすく、外から見たときに魅力的な街になると思います。すぐにとはいかないでしょが、将来的に秦野市のシティイメージが上がる協力も出来ると思っておりますので、こういうことを着実に、または大きなビジョンを掲げながらやれれば面白いのかなと思います。これは大学というよりも私の個人的な意見として、以上のような感想を持ちました。

【東海大学高等教育室室長】『学園都市東海』と御提言いただいたことは、大学にとっても非常にありがたいことだと思います。現在秦野市とは幅広い事業を実施していますが、学園都市としての特徴を広域連携の中で秦野市や近隣自治体と共に出していかないと、大きいとか広いと言うだけで終わってしまうような気がします。つくばのロボットのように、一つの大きな柱となる特徴が出せないかというところが、課題であろうと思います。

【東海大学地域連携センター地域連携課長】我々教職員は、東海大学に対する帰属意識を高く持っています。学生は4年間卒業するまでの中で、東海大学に対して帰属意識をどれだけ高められるのかがポイントだと思います。帰属意識を高めることによって、ここが自分の第二のふるさとだと感じるのではないかでしょうか。我々の世代であれば、卒業後も下宿先の大家さんへ挨拶に訪れたりと、地域への帰属意識は非常に高いものがありました。ですから、まず大学に対してどれくらい帰属意識を持てるのか。本学のように非常に学生数が多いと、卒業後地元に戻れば卒業した大学は平塚市だったかなというくらいの感覚しか残りません。ちょうど5年にわたるトコラボ事業が終わった段階ですので、我々としてはこれから大学としてさらに地域との関わりを深めるためにはどうすべきか、これから進めていかなくてはならない重要な課題だと思っています。そういう意味でも、地域と学生とが交流を図れるように、そして、学生が私の住んでいたところは秦野市だと印象に残るよう、地域とのつながりを深めていければと思います。次の質問にもありますが、1学年7千数百名いる中で、わずか秦野市に就職している学生は18名しかおりません。地元出身の学生も多いと思うのですが、UターンどころではなくIターンで出て行ってしまう学生もあり、それが秦野市の人口減少につながっている部分もあるかと思います。私は就職の仕事が長かったのですが、まだまだ地元に対する帰属意識が少ないことがこの就職の情報からも見て取

れます。秦野市自体が、ここで住みたい仕事をしたいと思えるような街にならないといけないよう思います。

【東海大学高等教育室室長】最後のデータ的な質問についてですが、起業の事例に関するデータは大学にないとのことです。就職状況については、合計で18名です。文系理系学際系と分けており、学際系は教養学部と体育学部になり、文系が7名、理系が8名、学際系が3名で合計18名です。男女比は男性17名、女性1名です。半分以上が市関係か教育関係を就職先としており、民間企業は少ない状況です。以上で、質問に対する回答及び報告とさせていただきます。

【部会長】ありがとうございました。いろいろなトコラボの成果をこれからどうしていくか、教育の問題やいろいろな関係についてのお話をいただきました。時間が少なくなってきたが、せっかくの機会ですので皆様から御質問はありますでしょうか。

お話を伺いしますと、発展の可能性自体は非常にあると感じましたが、具体的にどういう形で次のステップに行くかがなかなか見えないように感じています。先程のお話では、今年度からスタートした一般の教育カリキュラムをこれからどう専門課程に結び付けていくかということでした。授業として考えた場合は、地元から近いというところに道があるというお話でしたので、秦野市として協力する余地はきっとたくさんあると思います。大学のカリキュラムとしてこれから新しい機会をつくることが増えていくと、市側としては先程平塚市長との例がひとつ挙がっていましたけれども、それこそ機会があればあるほど良いと考えてもよろしいのでしょうか。

【東海大学地域連携センター所長】トコラボによって大学の学内の地域連携の意識も非常に醸成されてきたのですが、問題は、教員が自分の授業の中でそれを組み込んでいくイメージがまだまだできないという状況なことです。そういう意味では、自治体に協力をお願いしたいことの一つとして、先生方は事務的なことが意外と難しかったりもするので、先生方のバックアップなども含めて、逆にカバーいただきながら、うまく駆り出していただくことです。そうすると、もう少しいろいろなことができるような気がしています。

【東海大学高等教育室長】質問事項の7その他に対する回答では、起業に関するデータがない、あるいは公的機関への就職が多いという内容でした。私は現職に異動する前は産学連携の部門におりましたので、そのような視点から少し補足させていただきたいと思います。秦野市内への就職者数データを見ますと、就職先として大学との産学連携に関連してよく名前の出るところが傾向としてあるように感じます。私も起業の例やデータを持っているわけではないのですが、秦野市内の企業のご子息の方が大学で研究をされて、学業が終わったあと社会人の大学院生として入学され、研究活動をして、技術を

磨いてから再び企業に戻られるというケースも実際にあります。就職数の伸びを促すには、やはり产学連携という活動も一つ必要なキーワードになってくるような気がします。

【部会長】一番の目的は学生教育にどう生かすかということなのでしょうが、行政との関わりといったテーマが出てきたときに、うまく学生を指導する先生のテーマと合えばもっと良いのですが、例えば行政が抱えている課題はこういったもので、それをリストアップして、先生のほうに投げかけて、それがうまく紹介されてプロジェクトに展開するような形がよろしいのでしょうか。あるいは、教えている先生方にこういうテーマだったら地域で何ができるのか、どちらが強くなるのか、あるいはどんどん地元から出していけば先生方は学生教育が中心といえどもケーススタディとして取り入れようという流れが強いのでしょうか。どうなのでしょうか。

【東海大学地域連携センター所長】プロジェクトに実質的につなげていくためには、誰かがどこかに具体的な着地点をイメージしなくては動かないと思います。それが最初からあるケースと、そこをどうにか御相談したいというケースとがあります。そこを先生方に話を持っていく前にクリアにしておかないと、先生方からは何をしようとしているのかと言われてしまいます。我々も御協力しますし、逆に行政の方からある程度の着地点をイメージしながらお話いただく必要がありますし、いずれにしてもお話を持っていく前にはその部分をクリアにすることが重要なと 思います。期間であるとか、成果物等のイメージであるとか、場合によってはお金の話であるとか、そういう面にもつながっていくかもしれません。

【委員】私が横浜国立大学で非常勤講師として講義を始めたのは2005年からですが、2004年に同じような文科省の地域連携事業に取り組んでいました。大学内の教員ではとてもできないから公務員であった私に依頼がありました。5年間の補助金交付終了後も規模縮小は避けたいということで、学内の予算を確保し、その5年後に地域実践教育研究センターを立ち上げています。今年は新しい学部が新設され、発展的に進められています。私も詳しくはないのですが、すでにカリキュラムに落とし込んでいると思います。前後期それぞれに都市計画というような理系の科目と、私が担当している地域経済との二つを必ず履修するように組まれています。その他、各先生がちゃんと付いて、チャレンジセンターと同じように学生主体の実学的な活動があります。そのコマを合計していくつか取ると、副専攻コースとして地域連携のようなものにも携わったという卒業証書を出して別に認定しています。就職にも有利に働くよう、学生は主専攻の他にこういうこともやっているという仕組みをやっていると思います。文部科学省が定めるカリキュラムをどこまで工夫したのかはわかりませんが、そのようなことをやっているよ

うに聞いています。参考になればと思います。併せて質問なのですが、横浜国立大学は最寄りの駅が相鉄線の和田町駅ですので、和田町商店街の活性化について取り組んでいますが、東海大学の場合、全国にキャンパスがあります。全国規模で各自治体と連携されていますが、校舎ごとに地域的な差はあるのでしょうか。

【東海大学地域連携センター所長】校舎ごとの差というのは、もちろんあります。もう一つは、校舎ごとに学部が異なりますので、それぞれにできることやテーマが違います。地元の課題は共通しているところがあるようになりますが、それに応えられるような体制が校舎ごとで違うというニュアンスがあります。それが現実の部分です。

【委員】都市部の自治体が持つ課題はいろいろあるでしょうし、例えば熊本での課題もいろいろあるかと思うのですが、エリアによって地域が求めるニーズというのは当然異なるのでしょうか。

【東海大学地域連携センター所長】それぞれの地域が持っている資源を利用しきながら地域の課題が入ってくるケースが多いので、求められ方が違うと考えたほうがよいかと思います。清水校舎は海洋学部だけなので、その地域が持っている資源を使ってブランドを作るといったように、特徴が全部異なります。トコラボは、なるべくその情報をみんなで共有していこうということで始まりました。先生方のつながりはできるのですが、実質的に人的交流がスムーズにいくかというとそうはいかないというのが現実です。

【東海大学高等教育室長】湘南校舎の場合はたくさんの学部を抱えており、理系・文系があるキャンパスですが、地方ではそうはいかないところがあります。逆に地方では、総務省や自治体も含めて補助金等があり、どちらかというと大学間連携といいますか、湘南校舎とは違う連携の仕方が見受けられます。特徴を生かした協力、あるいは他大学との連携を含めて、地域連携というものを考えていくと形になろうかと思います。

【委員】生涯学習センターが相模大野にあるというお話をありがとうございましたが、利用者の数を考えればそれも妥当かと思います。その一部を移管するというのも現実的ではないのかもしれません、地域として大学からの恩恵を受けたいと思うのですが、今の秦野市における利用状況から考えて出前授業の可能性はどうなのでしょうか。

【東海大学高等教育室長】出前授業は、子どもたち対象のものや図書館でやっている市民講座があります。

【東海大学地域連携センター所長】相模大野での講座はこれまでの実績がありますので、ある程度リピーター的な受講生が確保できています。ただ、講座の中には、定員まで集まらなくて開講できない講座もあります。例えばそれらを秦野市に持ってきたら、どんな可能性があるのかが焦点になります。

【東海大学地域連携センター地域連携課長】要望があれば、御相談には乗りたいと思います。

【東海大学高等教育室長】もともとは、本学の高輪キャンパス内にあったエクステンションセンターで講座を開設していました。それが2017年の地域連携センター発足と同時に、高輪キャンパスから移転してきました。湘南キャンパスでも語学を中心とした市民講座を開講していたため、もともと高輪キャンパスでやっていたものをどうしようかという話になりました。場所を検討したところ、相模原市とも協定を結んでいた中でちょうどユニコムプラザという会場があったので、これまでメインで使わせていただいている状況です。

【東海大学地域連携センター所長】逆に相模原市が利用されることもあり、別の会場に広げたい気持ちもあります。

【東海大学高等教育室長】ユニコムプラザでの講座は有料で、かなりいろいろやっている市民講座になりますが、市図書館との事業については、市民の方に対する行政サービスの一環として実施しています。それに我々が協力する形で、文学系の講座が多くなっています。先程の御質問にありましたように、一部を移管して持ってくるという部分では、可能性はあるように思います。行政が市民サービスの中で違った毛色の事業をやると考えるのであれば、本学としてもそれに対する協力ができるかもしれない、できることはあるのではないかと思います。

【委員】私も東海大学の出身ですが、地元で就職せずに東京に行ってしまったというお話そのままで、数年経って秦野市に戻ってきました。地元に大学があるのは非常にありがたいことで、私のように近い大学に行こうと思い入学した学生もいます。大学としての本来のアカデミックな部分が地元に還元できるような仕組みがあるといいのかなと思います。先程あった产学連携や出前講座等に積極的に取り組む必要があるのではないかと思うのと併せて、東海大学が多くの学生さんを抱えているという意味では、地元としては若い方が多くいるということを有益に、うまく活用できるようにしていかないといけないのかなと思いました。先程帰属意識というお話がありましたが、私は地元出身なので帰属意識があります。自分の学生時代を振り返ると、全国各地から入学してきた学生にとって東海大学イコール秦野、平塚という意識をあまり持っていました。神奈川県の端に位置しているという感覚を持っている学生がいたように思い出しました。大学と市の行政もそうですが、地域の住民と主体である学生とがもっと懐に入って、お互いにつながれるような取組みができるといいのではないかと思っています。一つには、東海大学はスポーツが強いので、市民の方がどれだけ東海大学のスポーツを応援しているのかもあります。市民が東海大学に寄り添って、近付けるような意識

が醸成できれば、学生側にも4年間秦野市で市民にもお世話になったというような意識が芽生えるように思います。住や食、地元にこんなにおいしいものがあったというところも、積極的に秦野市としてもやっていったほうがよいように思いました。お話を伺いてきて、その辺をなんとかできると地元にある大学との関わりというのがもつとうまく構築できるように思つたところです。

【東海大学地域連携センター所長】スポーツでは、特に地元の方に応援していただくと関係づくりがしやすいかと思います。学生の金メダリストに周辺を凱旋してもらつたらいいのではないかと思つたりもしますが、垣根が高いところもあります。そういう関係性になればいいかなと思います。

【部会長】それでは、予定した時間を少し過ぎてしましましたが、本日はありがとうございました。充分に消化しきれたかはわかりませんが、非常に魅力的な取り組みをされているとのことでしたので、ぜひアイデアを持ち帰つて、市としてまとめて、考えさせていただきたいと思います。議事1はこれで終了したいと思います。ありがとうございました。

### 議事(2) 現地視察

— 現地視察（東海大学内中央図書館、チャレンジセンター） —

### 議事(3) その他

【部会長】こちらのクロスクエア内会議室では、本日の感想や意見交換の時間を取りつけてありますので、自由にお話いただければと思います。

【委員】東海大学からいろいろお話を伺いましたが、地域と大学とのつながりが結構少ないとある意味ではショックを受けました。つながりがあるても軽い付き合いがほとんどで、地域と深くつながって何かをやるということがあまりないように感じました。また、秦野市内への就職に関するお話では、1学年7千人の学生に対し18人しか秦野市に就職しておらず、そのほとんどが学校関係や市役所といったところに対する就職のことでした。これでは地域の中に溶け込んでいるという感じがせず、もっと考える必要があるのではないかと感じました。その中で一つ気になったのは、学生自身が大学というものを意識するが秦野市というものをあまり意識しないということです。背景には、教職員側もあまり意識していないのではないか、教職員のうち地域連携センター側は意識しているが、実際に学部の中で研究や指導している先生方にはあまりそういった意識がなく、意識した上で授業がなされていないような印象を受けました。その辺りからもう少しやり方を考えていかなくてはいけないのでしょうか。まだショックを受けている段階で、今度どうしていったらよいか考えがまとまつていませんが、この部会で

議論して考えていく必要があるように思いました。

【部会長】学生7千人に対し18人、しかもその大半が市役所と学校関係に就職しているという数字を聞いてしまうと、もっと違う関係ができるのではないかという印象を受けます。産学連携をしている企業への関心が高くなるというお話は、一つのヒントになると思います。産学連携の機会やインターンシップで学生を受け入れるような機会を持っていけば、秦野の魅力をPRできるチャンスがあるのかもしれません。

【委員】私も石塚委員と同じ印象を受けました。地域連携として何かをやらなくてはいけないからやっているという印象を受けました。それでも、やらないよりはやったほうがいいとは思います。私はこちらに何度も来たことがあります。2、3年前のことですが、月に1回程度いろいろな国の留学生がここに来て、自国の文化について話してくれるものがありました。世界中からの留学生がいるので、結構面白かったです。いい講座だと思っていたらすぐにやめてしまうというように、腰が据わっていないのです。コンセプトのようなものがないと、できるところからやっていくということになり、結果としてこうなってしまうと思いますので、大学と市の双方でもう少し具体的に掘り下げて考えていく必要があるのではないかでしょうか。

【部会長】大学側の問題もありますが、市としてもこういうものをもっと体系的、継続的に一緒にやっていきましょうという持ちかけをしなくてはいけないと思います。ある一定のコンセプトに基づいて、このスペースで大学と協力しながら提携的にイベントやプログラムなどにつなげていければ、きっともう少し建設的で効果のある事業展開ができるのかもしれません。

【委員】学生は在学期間が4年と限られており、いずれは就職活動や研究活動に専念するようになります。地域と共に何かするには、実質3年程度しかありません。学生はイベントのような場合は勢いがあってよいのですが、大きなコンセプト的なものを考えてそれに従ってというようなことになると難しいように思います。それを大学側でやろうとすると、地域連携センターや、実際に学生たちを動かすのはそれぞれの学部の先生方が主体になってきます。そういった方達がきちんとビジョンを持って進めていかないと、ほんの単発的なイベントにしか成り得ないのではないかと思います。

【委員】難しい問題です。例えば、先程お話した横浜国立大学は横浜市保土ヶ谷区にあり、保土ヶ谷区と提携しているようです。キャンパスは保土ヶ谷区のみに位置しており、東海大学のようにいくつかの自治体にまたがっているものではありません。最寄り駅は相鉄線の和田町駅で、こちらと同じように高台に位置しており、商店街を通り抜けて坂を上っていかないと大学に到着しないという点では地理的条件は同じです。和田町駅の商店街がさびれてしまっているということもあり、こここの商店街で作られたお弁当を「和田弁」

と称して、大学内でお昼御飯に販売するようになりました。こうした取組みからまず距離を近付けていき、お弁当をきっかけとして、商店街内の空きスペースを学生同士やサークルでの溜まり場にしてもらえるような、そんなことをやっています。こうしたことから、和田町商店街のセールやお祭にはサークル単位で学生が参加するようになったようなので、何かしらのきっかけがあるとよいと思います。地元のお祭りやイベントがあり、秦野市であればたばこ祭があります。大学や市役所といったオフィシャルなところではなく、まずはきっかけを作つてあげるとよいのではないかと感じたところです。帝京大学もそうですが、体育会系のスポーツ部は寮を持っており、部員は寮生活しています。寮は意外と地元と仲が良いといいますか、いつも決まった飲食店でご飯を食べたり、いつもこのお店で集まるといったように地元商店の常連です。例えば、帝京大学には数年前に総合武道館ができたのですが、そこで柔道や武道に励む学生はキャンパスにはあまり来ず、武道館周辺でお昼御飯から何から何まで過ごしています。地域との距離も近いのではないかと思います。おそらく東海大学にも体育会の寮がいろいろなところにあると思います。そこに行ってみると、こちらが思っているよりもごく自然に食堂屋さんと親しいといった、そんなところにヒントがあるような気もしました。

**【委員】**たばこ祭では、会場が秦野駅周辺になります。大根地区では、そういったお祭はあるのでしょうか。

**【事務局】**たばこ祭と連動しているものはありませんが、イベント広場を利用して頻繁に催しをやっています。先月もイベントが開催されました。ただ、鶴巻温泉まつりや丹沢まつりのように、東海大学前駅独自で同程度の規模のものではなく、小刻みにイベントをやっています。学生も何らかの形で携わっている様子は見られますが、市が直接携わってはおりませんので、商店街や観光協会との連携かもしれません。

**【東海大学地域連携センター職員】**つい先月の夏祭りにも、チアリーダー部と応援団が参加協力いたしました。たばこ祭についても、毎年本学から協力させていただいており、今年度もラグビー部と、SNSを利用した広報関係で学生2名の協力依頼をいただいている。体育学部だけではなく、広報関係では教養学部等の学生も協力しており、本年度もそういった形でお祭に協力させていただいている経緯があります。

**【部会長】**そのような協力というのは、「たばこ祭でこういうお手伝いをお願いします」と秦野市側からの要請に応じて、地域連携センターが今年はどこに声を掛けるか決めていくということなのでしょうか。

**【東海大学地域連携センター職員】**基本的には、秦野市の担当課から企画課を

通して要請をいただき、大学窓口である地域連携センターに連絡が来ます。こちらでは、そういったニーズに応じて適任者を探すというような流れになります。

【部会長】先程のチアリーダーや応援団の場合は、市は通さずに直接商店街の方がアプローチしているということですか。

【東海大学地域連携センター職員】東海大学駅前商店街に関しては、秦野市企画課を通さずに直接やり取りしています。形式的に大学と市の提携事業という形を取らなくても、商店街に関しては話が通るような親密な関係性なのかと思います。秦野市というくくりの中でも、この駅前商店街については密接な関係にあると思います。

【部会長】お話を伺いしていると、もともと大学を作るときから地元の方々との説明会や協議といったものをずっと続けていらっしゃったので、何らかの関係性が続いているのだと思います。あと、委員のお話を伺いすると、大学が街に出てきてもらうということもありますが、きっかけとして大学でお弁当を売りに行くという手段がありますので、地域が大学に出向いていくということがあってもよいかもしれません。東海大学内の生協で使っている食材は、地元のものを使っていますか。

【東海大学地域連携センター職員】今日は学生のいない夏休み期間中なためやっていませんでしたが、普段であれば学生食堂のレジ奥にある売店ではサラダバーをやっています。平塚市と提携して、地産地消のようなコンセプトで野菜を置いています。当センターに特任の地域コーディネーターとして、元平塚市副市長だった方が前任にいらっしゃいましたので、その関係性もあり、昨年度までは平塚市とフットワーク軽く連携ができていた部分もあります。大学主導というわけではないと思うのですが、結果的に平塚市の野菜を採り入れたサラダバーを行っています。教職員はもちろん、学生からも結構な利用があり、お昼時は2回も3回も野菜を入れ替えてます。食は私たちの生活に最も密接していますので、そういったところから地域に关心を持つというのはいい意味でのモデルケースではないかと思います。

【事務局】地域コーディネーターは、今年から伊勢原市職員のO Bが就いていらっしゃいます。その前は平塚市職員ということですが、秦野市はどうでしょうか。

【東海大学地域連携センター職員】地域コーディネーターの選出については、詳細は分かりかねます。前任者については、文部科学省のC O C事業の期間に国からの補助金で給与をお支払いしていましたので、任期がありました。C O C事業の期間は終わりましたが、任期はあるかと思いますので、この次に秦野市職員だった方にお願いする可能性もあるかとは思います。

【部会長】金銭的に一方へ負担が掛かっては大変ですので、職員交流として給

料は所属元で支払うというやり方もできるのではないかでしょうか。

【事務局】秦野市としては送り出すくらいの気持ちで、コーディネーターをやらせていただければありがたいと思います。

【委員】いろいろとお話を伺いてきて、難しいと思うところ、簡単にできそうだなと思うことがあります。東海大学近辺を地域的に見てみると、平塚市から見ても遠く、秦野市から見ても盆地の外ですので、独自性があるようで、逆に言うと忘れられている地域になっているようにも正直思えてしまいます。今回は秦野市を中心に考えているところですが、この地域だからこそできることが秦野市的一般市民にももっと広がるようなきっかけがあるといいのではないかと思いました。先程のお話と重複しますが、学生と市民、あるいは直接商店街の方と学校とがやり取りできるというのはまさに地域性だと思います。学生食堂でアルバイト求人情報の掲示をざっと拝見したのですが、秦野の企業が全然ありませんでした。確かに、秦野市内の企業が東海大学にアルバイトなり求人なりを出しているという話は私の周りでもあまり聞いたことがありません。そうなると、企業としてもあまり関わりを持ってはいないのではないかと推測しました。大学生の若い力というものは非常に貴重な財産ですので、東海大学の学生をうまく地元としても活用でき、互いに共生共存できるような仕組みができるといいのではないかと思いました。

【部会長】秦野市内の企業からアルバイト求人が少ないので、どうしてでしょうか。例えば、東海大学生に対して他の企業が求人を出していることが分かれば、秦野市内企業が求人を出す可能性は充分あるということでしょうか。単に今まで考えていなかっただけの問題なのでしょうか。

【委員】実際のところはわかりません。

【事務局】確かに商工会議所の動きを見てみても、あまり東海大学に対する雇用のイメージがないのかもしれません。

【部会長】そういったイメージができるだけで、違ってくるかもしれません。

【委員】おそらく、連携の仕組みを作るところまではとても一生懸命やるでしょうが、実際には役所主導ではなかなかうまくいきません。民間企業もしつかり仕組みに乗り、そこに利がないと、継続性は生まれないと思います。

【部会長】広がりが出てきません。

【事務局】JCでは、大学との関わりはどうなのでしょうか。

【委員】子どもを呼ぶような事業では、時折お手伝いを頼んでいます。たばこ祭のジャンボ火起こしというイベントでも、ローバースカウトの方20名程にお手伝いしていただいています。昔は高校生ボランティアにお願いしていましたのですが、組織がなくなってしまったというか、動きがなくなってしまったため、ここ7、8年は東海大学にお願いしています。

【事務局】JCあたりから大学との付き合いやパイプが少しずつ増やしていく

ると、変わってくるかもしれません。

【部会長】現地視察させていただいたこともあり、私が一番印象に残っているのはチャレンジセンターで拝見したソーラーカーです。大学が持っている研究力や文化的なことに貢献している力といった部分は、このクロスクエアに展示してあるパネルからいろんなことをやっていらっしゃることが見て取れます。そういうことが身近にありながら、ソーラーカーに携わる方が実はどこを見て仕事しているのかというと、別に地元を見て仕事しているわけではありません。大会が開催されるオーストラリアを通して、世界を見ているわけですよね。同じ空間にいながら、仕事のマインドは世界に向いているということがあります。それがあるために大学がやっている活動と地域とが離れてしまっていると思います。ソーラーカーを開発する大学生が地域の小学生に対し、オーストラリアで開催された世界大会で戦ったことを目の前で見せてくれて何かやるということは、これはすごく価値のあるなのではないかと思います。大学が取り組んでいる研究あるいは成果といったものを、もっと分かりやすい形で市民が触れる機会が作れればよいのではないかでしょうか。小学生にとっても、将来は東海大に入ってソーラーカーを作るという夢が生まれます。そういうことが、隔たりを取るときに一番重要なような気がします。大学としてはなかなかそういうインセンティブが必ずしも湧かないとなれば、市が少しの機会を作つてあげてはどうでしょうか。ソーラーカーだけでなく、おそらく他にもいろいろといいことをやっておられる気がします。そういうことが日常的にできるような街になると、「学園都市・東海」というコンセプトにふさわしいものに一歩近づくのではないかというのが一つです。もう一つは、それほど現実的な話ではありませんが、学園都市のお話が出たときに、構造特区のようなものについてお話があつたことについてです。併せてもう一つお話されていたのが、東海大学生にとっての地域というのが必ずしも秦野市ではないということでした。これにはおそらく2つの意味があつたかと思います。一つには、自分たちの住んでいる場所を地域として連想してしまうということです。もう一つには、あまりはっきりとは仰いませんでしたが、東海大学自身も自分たちが秦野市という場所よりも、伊勢原市や平塚市といった地域にいるという意識なのだと思います。構造特区の話に戻りますが、学園都市について考えた場合、協議会を作つておられる3市1町くらいで学園都市地域のような構想を持ち、その中で平塚市や伊勢原市は医療系の事業を始めたので医療系の特区にして、秦野市は防災系の特区にするだとか、あるいは全部で特区としてこの地区はこういうプロジェクトをやるだとか、そういうシナリオができるかもしれません。すると、それにそれぞれの特区を実現するために、大学あるいは大学生と事業との関わりを持ってもらえることを通して、アイデンティティを作つてもらうようになると思います。

そうなると、秦野市だけのアイデンティティを持ってもらうということは、東海大をキーワードにするとあまり現実的ではないように思いました。ただ、その中で秦野市の特色というものが出来たらいいのではないかとも多少思いました。それが2番目の話です。あとは、産学連携を考えたときにおもしろいと思ったことがあります。先程社会人入学の話がありましたが、ある企業をやっている人が社会人入学し、大学での研究結果を持ち帰って自分の仕事に生かすという流れができるとすると、そういうものも流れとしてできること面白いように思います。それも、地域としてどのように応援できるかということなのだと思います。そういうプロジェクトに際しては授業料を少し補助してあげるような制度があるかもしれません、私はそのようなことを感じました。あと、事業を実現するときにどういった関わり方があるのかということや、いろいろな関わり方があるというお話をありました。一番重要なことは、地域連携センターと市との間で日常的にどういうニーズがあるか常にコミュニケーションする場があれば大丈夫なのかなという気がします。やれば必要なニーズはたくさん出てきそうな気がしますが、具体的にどうしたらいいかについてはあまりイメージできませんでした。東海大学としては落としどころが重要ですという話をされていましたが、プロジェクトとしてまとめようするとおそらくそうなのでしょう。秦野市として要望があるときに地域連携センターへ話を持って行き、むこうで折り合いの付くプロジェクトとして成立すれば、この先何年間かの間に2個とか3個とか事業化していくという可能性もありそうな印象を持ちました。

**【委員】**何をもって大学との連携がうまくいったと言えるのかについて、ある程度考えておく必要があるかもしれません。役所が考えなくとも、学生と地元の市民とが互いに連携できていれば理想だと思います。そのきっかけづくりとして、何を考えるかということだと思います。体育会の寮があるエリアは、目に見えないだけですでに連携しているような気がします。きっかけづくりという点でいえば、例えばソーラーカーで優勝したのであれば、市役所前の通りを歩行者天国にして、ソーラーカーを走らせて世界一を祝うパレードをするのもきっかけの一つのような気がします。やっていなかっただけで、すでに連携している部分もあるような気がしますし、今言ったようにきっかけはいくらでもありそうな気がします。東海大学にはソーラーカーだけではなくて柔道の金メダリストといった世界一がたくさんありますので、市民が祝う会などをセッティングすれば市民と共有できるのではないかでしょうか。

**【部会長】**昨年度名水に関わるテーマで審議した際に、シティプロモーションの話が出て、そこで東海大学という話もありました。今のお話は、シティプロモーションに実は東海大というものがものすごく重要な素材になりうるということですね。東海大学において世界一やいろいろなものがあったら、そ

れを市がシティプロモーションにどのように使わせてもらうか。そうすると、大学と一緒にある街だという認識がすごく深まっていくように思います。

【委員】名水がテーマのときにも検討しましたが、それを使って秦野市のブランドイメージをいかに上げていくかという視点で検討しました。秦野市のイメージを聞いてみると、ピーナッツの街くらいあまり良くないようです。東海大学の持っている知的な資産をうまく市民に開放することで知的レベルが高まる、という情報が発信できるといいのではないかと思います。ソーラーカーも画期的なことでいいと思いますし、それ以外にもいろいろなものがあります。そういう知的資産を手軽に市民へ開放できるような仕組みができるとよいと思います。東海大学側としては決して否定されてはいませんでしたが、出前講座や生涯学習といったもののニーズをうまく収集しながら、それを市がちゃんとアピールして、こういった知的資産が提供されていますよ、というような仕組みであろうかと思います。柔道の金メダリストに話をしてもらってもよいでしょうし、文学の話をしてもらってもよいかと思います。そういうものをやっていくと、秦野市民の知的レベルが上がってよいのではないかでしょうか。秦野のブランド力が、東海大学の力によって形成されていくようになればと思います。

【部会長】ローマやフィレンツェといった街を訪れると、普通に歩いているだけでも建物や彫刻が日常的に目に触れるわけです。そういうものが目に触れて育つと、次世代の文化水準や知的水準に非常に影響を与えるような気がします。それに匹敵するような、現代の最先端の知識やものが本当はあるのだと思います。それらが日常的に目に触れるような環境づくりができると、子どもたちが多感な時期に自分の人生を決めるとき夢を持つことができます。そういうものに触れる機会はおそらくなかなか作れないものですが、それが街をふらっと歩いているうちに目に触れるような環境がうまくできていくと、いろいろな可能性があるような気がします。そのためには、こういった場所をうまく活用するということかもしれません。相模原市で開催している市民講座でペイしないために閉講しそうなものがあれば、それをそのまま移行してきても絶対うまくいかないと思いますが、秦野市であればペイしそうなものにモデルチェンジして開講してもらうということも、可能性としてあるような気がします。

【委員】秦野市立図書館でやっている浮世絵の展示室も、あそこだけではなく、例えば定期的にこういったスペースに持ってきて展示するのもよいかと思います。秦野市立図書館は車がないと行きにくい立地ですが、こちらであれば駅に近くで交通の便がよいので、直接的には東海大学との関係ではないですけれども、秦野市のブランドイメージという意味ではいい材料になるのではないかと思います。お隣の鶴巻温泉駅にある宮永美術館ですとだいぶ使い古

されたような気もしますので、新しい場所で浮世絵の展示をしていただくのもよさそうです。

【事務局】市民の側が持っている文化もありますが、大学の本領である知力や文化を見せるということは、お互いに魅力を見せるPRあるいは広報という意味合いもありますし、それに触れることで子どもが将来の夢を多感な時期に引き出されるような経験にもなります。これまでお話を伺ってきて、大学が持っている知的資産を見えるようにするということでいろいろな効果があるようと思いました。

【部会長】今のお話でいうと、知的資産というものを何に役に立てるのかということでは、対象別に、子どもや産業界、あるいは市の行政そのものの効率改善や問題解決などに分けていくという整理の仕方かもしれません。もともとは先程お話にあったような問題解決型の授業を活用して、授業とか先生たちの持っている専門性を生かして市政の問題解決に生かせないかというのも発想にあったと思うのですが、それもいくつか効果がありそうですよね。

【事務局】受験生も増えると思います。

【委員】おおね公園に温水プールがあり、金メダリストの金藤選手を呼んであそこでスクールを開催しました。そのあと、もう一回講演会を企画しようとしたのですが、練習拠点がナショナルトレーニングセンターなため実現しませんでした。我々のほうから見ても、うまく連携してイベントを企画・開催する機会や手段がなかったのですが、これからは地域連携センターにお願いすればその辺もいろいろ間に入っていただけそうな気がします。これからまた相談させてください。

【部会長】だいたいよろしいでしょうか。今日は現場を見ていただき、現場の担当の方に御意見をいただいて、インプットしていただいて、それをもとにブレインストーミング的に皆様から御意見をいただきました。今後これを取りまとめていくというのが、次の段階になるかと思います。

それでは、事務局から、連絡事項等をお願いします。

【事務局】一次回会議の日程調整—

【部会長】皆様よろしいでしょうか。いい報告書をまとめるために、次回以降もよろしくお願ひいたします。

それでは、本日は以上で終わります。ありがとうございました。

—閉会—